

■ ■ ■ 編 集 後 記 ■ ■ ■

107号の表紙は、すっかり秋の深まりを感じます。最近、朝晩の冷え込みがつかなくなり、ストーブを付けるとほっとしますが、冬の雪かき&ツルツル路面を思うと頭が痛くなります。

この編集後記を書いている今日の日付は10月23日。本号の特集(防災研究会設立10周年記念事業 都市型災害に備えて ― 減災と技術を考える)でも報告されている新潟県中越地震からちょうど1年であり、今朝もニュースでは現在の山古志村の様子が映し出され、地域住民の生活復興が思うように進まない状況が報告されていました。

そこで暮らす人にとっては、生活費を生み出すための棚田のような生産基盤や働く場、ニシキゴイのような地域資源が復興しなければ、生活の復興はあり得ません。

私が日頃、仕事でお世話になっている漁村も同じで、漁港や護岸、道路など社会基盤の復旧はすすんでも、出漁するための漁船や漁場がなければ生活は成り立ちませんし、漁業が復興しなければ関連産業も地域も復興できません。

山古志村のような中山間地域は、洪水防止、水資源かん養、空気の浄化など都市の生活を守る多面的な機能を持ち、そこに人々が暮らし自然や文化を守り続けることによってその機能を維持しているわけですから、科学技術や技術者はそのような地域の生活の復興までしっかりと支える必要があるとつくづく思います。

(第107号 編集担当 古屋 温美)